

『キテレツ絵画の逆襲 「日本洋画」再発見』のデザイン A5判・並製／新潮社／2025年9月刊



キテレツ 絵画の逆襲

新潮社



オリジナリーアイデア

Originally
December
2025

『キテレツ絵画の逆襲
「日本洋画」再発見』のデザイン 1

『実さえ花さえ』のデザイン 5

展覧会『お父さんお母さんへ
ハンセン病療養所で書かれたある少年の手紙』
のデザイン 6

思い出のクリフォード 10

日日読書 10

メモランダム・本のデザイン 11

昭和残照 12

N'S COLUMN 13

トキドキ漫画 14

MY KID'S DIARY 15

魚の環世界 16



講談社文庫

朝井まかて

『実きえ花きえ』のデザイン

講談社文庫／2025年4月刊

時を経てこのテレビ一作の文庫新装版を出していただけることになつた。装幀で希望したのは、江戸の花をデザインしてほしいということ。私の望みは、酒井抱一たちの植物画でかなえられた。桜と朝顔、つわぶきの美しさを目にするたび、ひたすらだつた自分がよみがえる。今も、小説がただただ好きで書いている。無我夢中はずつと続いている。

が江戸の園芸は夢中になつたのは四十代も半ば過ぎ、小説を書きたいのに書けない自分を持て余していた頃のことだ。いや、もしもかしたら江戸の園芸を題材にすれば書けるかもしれないとお尻をまくつて挑み、これが第三回小説現代長編新人賞奨励賞を受け、『実さえ花さえ』でデビューすることができた。すべての運を拾い集めた心地たつた。とはいへ、デビュー後が順調だったとは言えない。売れず注目されず、次作の執筆に苦しんだ。

私が江戸の園芸に夢中になつたのは四十代も半ば過ぎ、小説を書きたいのに書けない自分を持て余していくた頃のことだ。いや、もしかしたら江戸の園芸を題材にすれば書けるかもしれないとお尻をまくつ



章扉(その1、その7)
扉裏は画家のプロフィール

「アート・リセット展」のなかでなぜかレッスン画がマニア化する理由 9
 青山和也著 100

異文化をめぐる「おはなし」 15
 岩田信子著 16

「中村りりやのアート」 4
 中村りりや著 5
 山本安弘著 67
 高橋由佳里著 83
 渡辺吉田著 84
 高橋由佳里著 95

「世界の中のキテナツ展」 179
 佐藤千鶴著 186
 「アート・リセット」を経て 157
 浅田真理著 158

日本に「身体藝術」が必要か 119
 松井洋子著 120
 「アート・リセット」 7
 松井洋子著 121

「アート・リセット」 6
 松井洋子著 122
 「アート・リセット」 5
 松井洋子著 123
 「アート・リセット」 4
 松井洋子著 124
 「アート・リセット」 3
 松井洋子著 125
 「アート・リセット」 2
 松井洋子著 126
 「アート・リセット」 1
 松井洋子著 127



日本に裸体画は必要か



異文化との出会いのはじまり



8-12 真鉄五郎《日のない自画像》
1915年 岩手県立美術館蔵

本文

今 回初めて、企画展発行物のデザインをBGXに依頼した。

チラシ・ポスター、図録のメインイメージの撮影では、手紙の内容・物量が伝わるように手紙を効果的に重ねていただき、タイトルも見る者を引き付ける形にデザインしていただいた。

収集した手紙の一部は、綴られている関係で2頁目以降を展示できないものもあった。それらについては、BGXが補正をした図録用の図版から複製を作成した。複製は、現物の手紙といっしょに並べてもそん色がなく、来館者の中にはその違いに気づかない方もいた程、精巧なものとして仕上げていただいた。

色校正では細部に渡り確認をいただいたが、非常に丁寧な仕事ぶりであり、その高い技術力に圧倒された。

刷り上がってき企画展図録を手に取った喜びは、未だに忘れられない。

2025年度企画展「お父さん お母さんへハンセン病療養所で書かれたある少年の手紙」は12月27日まで開催している。ぜひ、多くの方にこの図録（無料）を手に取っていただきたい。

国立ハンセン病資料館事業部事業課
主任学芸員 田代学



この企画展で展示するのは、療養所へ入所した少年が、家族へ書いた手紙です。

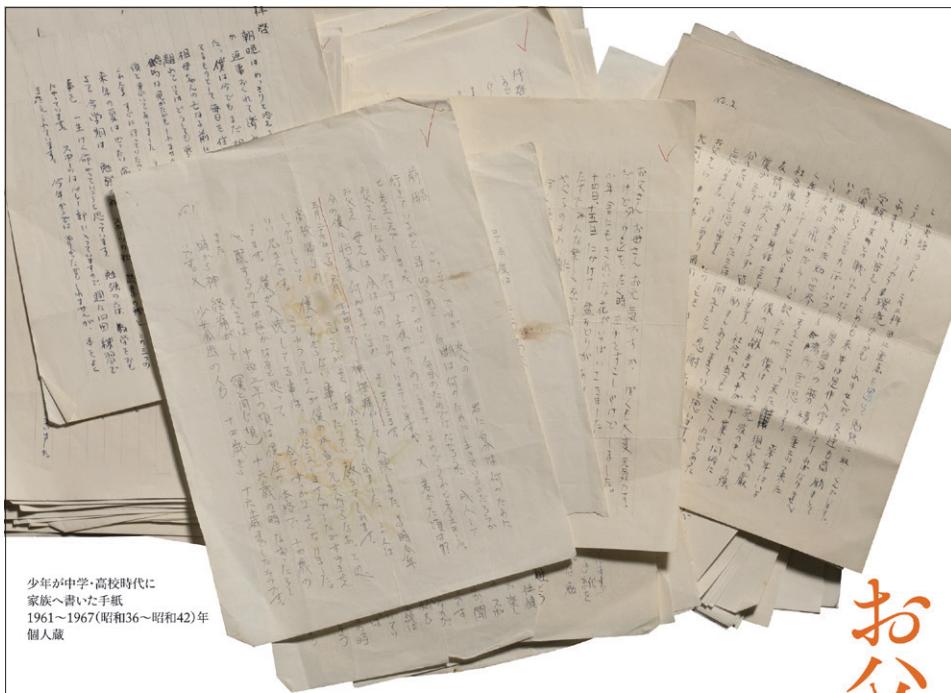
手紙には、家族と引き離された少年の思いが詰まっています。
そのうち菊池忠樹園での中学生時代から、長島愛生園での在久高等学校新良田教室時代の7年間（1961～1967年）に書いた13点を選んで展示します。
隔離された世界で扱られた手紙を通じて今なお感動する病回復者と
その家族をより幅広く差別について考えていただけたら幸いです。



長島愛生園で描いた高校時代の絵画展 2000年平成12年切 紙に水彩色鉛筆（制作：柳原 個人蔵）



チラシ裏



少年が中学・高校時代に
家族へ書いた手紙
1961～1967(昭和36～昭和42)年
個人蔵

2025年9月27日(土)▶12月27日(土)
国立ハンセン病資料館 1階ギャラリー

T189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13 Tel. 042-396-2909

開館時間 9時30分▶16時30分
休館日 月曜(月曜が祝日の場合は開館)および
「国民の祝日」の翌日にあたる平日

入館
無料

ギャラリートーク 14時▶14時40分

- ◆10月12日(日) ★10月18日(土) ★11月1日(土)
- ◆11月9日(日) ◆11月15日(土) ◆11月29日(土)
- ◆12月7日(日) ★12月21日(日) ◆12月27日(土)

企画展を担当学芸員が解説します。
定員は毎回30名、お集まりの人数で時間を
ずらしていく場合があります。
★の日はどちらに向け解説となります。

団体向けギャラリートーク

10名様以上、30名様以下の団体向けの
ギャラリートークを会場で実施します。

お申込みは下記にお問い合わせをお願いいたします。

- ◆見学希望日の1週間前までにお申し込みください。
- ◆都合により日程・内容等のご希望に添えない
場合がございます。予めご了承願います。

〈お問い合わせ先〉
国立ハンセン病資料館 事業部事業課
田代学(直通学芸員)

The National Hansen's Disease Museum
企画展HP

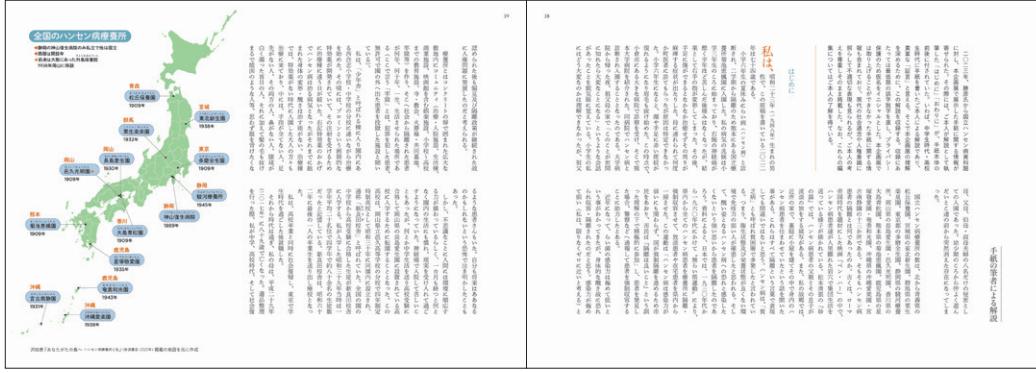
ハンセン病療養所で書かれた
ある少年の手紙

国立ハンセン病資料館2025年度企画展

僕は今でもまだ祖母ちゃんが死んだと信じられません。
まだ生きるものとして毎日を過ごしています。

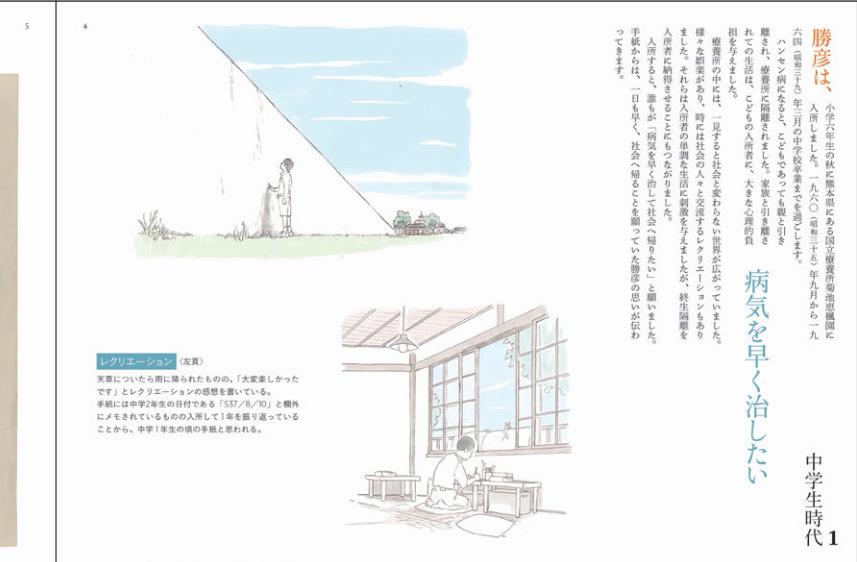
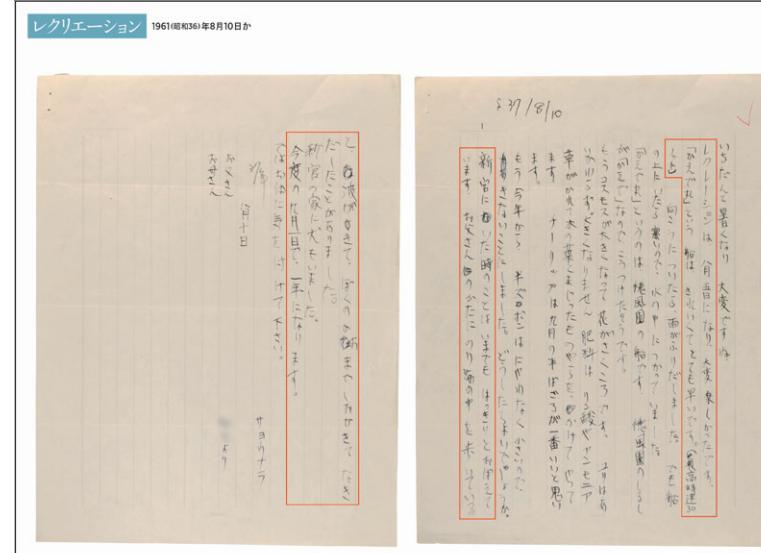
お父さん お母さんへ

展覧会『お父さん お母さんへ
ハンセン病療養所で書かれたある少年の手紙』のデザイン
A4チラシ・A1ポスター・B1ポスター・A4版図録

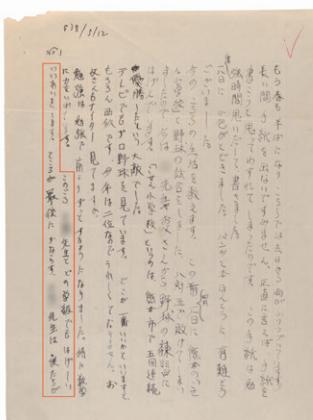
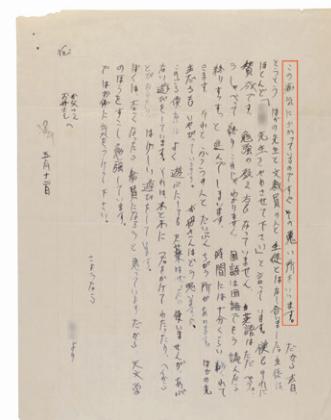


図録本文

展示と映像用に描かれた岩井友子さんのイラストレーションを図録にも。やさしい色とタッチで、療養所での暮らしなどが描かれています。手紙や解説のほかに、手紙からの引用の図表などもあり、それぞれを読みやすく、分かりやすくすることを心がけました。巻末の解説には、私たちからの提案で、13カ所ある全国の療養所の地図を。地図は、沢知恵さんの新刊『あなたがたの島へハンセン病療養所と私』(岩波書店)から流用させてもらいました。(赤波江)

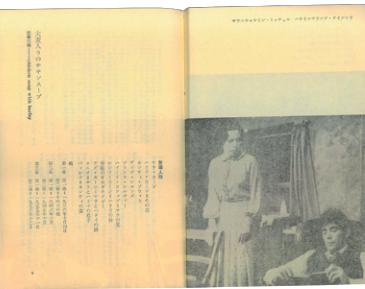
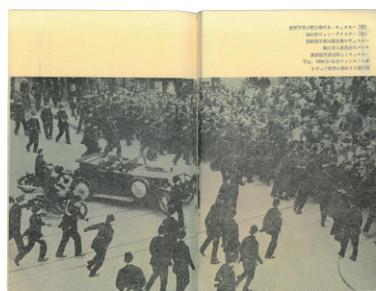
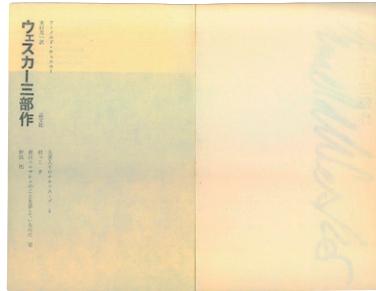


教師への批判、社会への反発 1963(昭和38)年5月12日





ウェスカー三部作



メモランダム・本のデザイン 32

ウェスカー三部作 その4 日下潤一

大きな 文字と小さな文字をそろえ
る時は、前回の錯視だけで
はなく、サイズの違う文字は小さい方が仮
想ボディと字面の空きが狭いので、大小で
はその差が出ることを考える。

表紙のタイルズペースの白の分量は、
同時にデザインされた「ウェスカー全作
品1」(カバー)とでは、「三部作」が広い。
『全作品』は絵柄(白抜きの42)がスペース
を占める。この『三部作』のタイトル文字
2行の背までと写真とのアキは、均等では
なく背の側(右)をあけている。写真との
アキの倍なのに、それが気にならない。

表紙と見返しは色紙を使わず、本文用紙
に近いクリーム色系のすこし厚い紙。まず
大きく右にウェスカーのサインだけの見開
きがあり、目次もかねたシンプルな扉につ

づく。文字は小口側に大胆によせている。

右頁は白で、その次の見開きは(1936

年ファシストの車を守つて群衆を排除する

警官隊)のキャプションのつく写真。

1936年10月4日、オズワルド・モズレーの

率いる英國ファシスト連合がロンドンのイ

ースト・エンドを行進しようとして、反フ

ァシスト派との大規模な衝突が起きた。

〈アーノルド・ウェスカーは、一九三三年、

ロンドンのイースト・エンドの貧民街に生

まれた。父親はユダヤ系ハンガリー人の仕

立屋、母はロシア人で、彼は貧困のうちに

幼年時代を過ごした。当時のイースト・エ

ンドは、ユダヤ人をはじめ、アイルランド

人々、追いつめられた貧民が集まつてお

り〉(巻末の解説)。

次の見開きは「大麦入りチキンスープ」

の扉。右頁に上演シーン。左頁にタイトル
と登場人物と時。

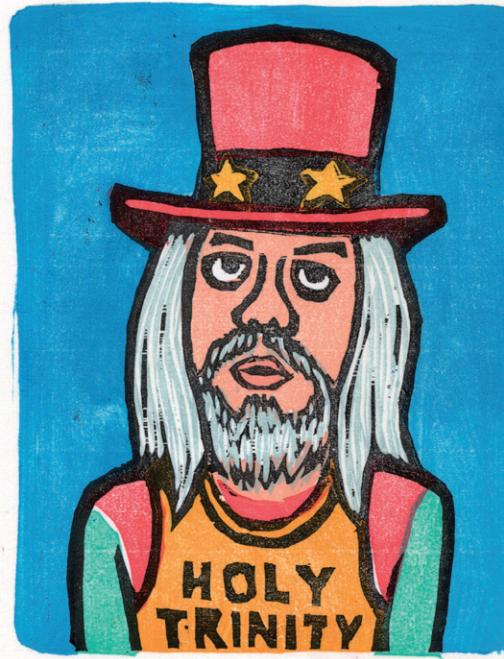
朝日新聞の文化欄「語る—人生の贈り物
—」の連載インタビューで津野海太郎さん
がこの本を語っている。「そこで私が最初
につくった本が、英國の若い劇作家ウェ
スカーの戯曲。木村光一訳の三部作で「晶文
選書」というシリーズを始めた。英國労働
者階級の「怒れる若者たち」の息づかいを、
20代の一人として伝えたかった。表紙はね、
稽古場のウェスカータたちの横長のモノクロ
写真をタテに配置した大胆なもので、平野
甲賀の装丁がカッコいいと評判になつた。

平野は私と同じ年(そこどいうのは小野
二郎と中村勝哉が立ち上げた晶文社)。今
も古びないシンプルで端正なデザイン。本
文も行き届いている。平野甲賀、26歳。

森英二郎 思い出のクリフォード②

力 一ペンターズやカーメン・マックレー、アレ
サ・フランクリンなどたくさんの人がカバー
している名曲「ア・ソング・フォー・ユー」やジョ
ージ・ベンソンの大ヒットで知られる「マスカレー
ド」を作ったレオン・ラッセル。ミュージシャンと
しても以前ここに描いたジョー・コッカーの「マッ
ド・ドッグス&イングリッシュメン」のプロデュー
スをしたり、ジョージ・ハリスンとシタール奏者ラ
ヴィ・シャンカールが主催し、ボブ・ディランやエ
リック・クラプトンなども参加していた「バングラ
デシュ難民救済コンサート」でも一番カッコ良かった。あの頃、レオン・ラッセルはぼくにとってはス
ーパースターでした。

そう言えば「スーパースター」というこれもカ
ーペンターズのカバーで知られる歌をレオン・ラッセルは友人のボニー・ブラムレットと作っています。



レオン・ラッセル Leon Russell
1942-2016

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「ブレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、「荷風と東京「断腸亭日乗」私註」(川本三郎著)、絵本『おとうさんのうまれたうみべのまちへ』など。

日日読書 大西良貴

38

暢氣眼鏡・虫のいろいろ

他十三篇
名跡・挿作
高橋英夫編

出典「暢氣眼鏡」は
丁度ヨセモト萬葉小説
から「虫のいろいろ」。
老女の虫の説くよ。
尾崎一雄(1899-1981)
の作品は一貫して、
その生活の大半を酒と
其の周囲の虫とを抱か
せる洒脱で軽妙な語
る筆である。

1571
岩波文庫

尾崎一雄
『暢氣眼鏡・虫のいろいろ』
岩波文庫/1998年

おおにし・よしたか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店 London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人々に支えられ営業を続ける。

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

十代の頃から私小説を好んで読み続けているが、尾崎一雄もその一人。「暢氣眼鏡」に始まるユーモア貧乏小説は、十歳以上年下の奥さんの天真爛漫さと、それに半ば閉口しつつ救われてもいる主人公の有様に惹かれる。いかにも大家然とした厳かさの師の志賀直哉に比べると、ザックバランでおおどかな筆致。

尾崎は若い頃の貧乏に加え、中期には大病を患い長い療養生活を送る苦労をしたが、八十過ぎまで生きた。自然豊かな相模で、木々や生き物ばかりか道端の石ころにも親しみを覚える暮らしぶりを読むと、なんとなくこちらの命も延びる心地がする。人間のさからへの嫌悪も時々噴き出しが、それを声高に主張することはなく、日常の中で実感したことばかりを綴っている。

小学生の頃、ちばあきおやはるき悦巳のマンガに親しんだように、白米のように飽きの来ない日常世界という、自分の生來の好みに合うものだったのだろう。

——○二五年三月初めだった。渋谷から乗

で降り、地上に出た。そこでバスを探せばよかつたのだが、横浜

の地理感覚に欠けた私は南と思われる方向に歩いた。本牧は遠かつた。そのうえ目当ての施設はわかりにくい場所にあり、三階建ての

入口には名称が小さくしめされているだけだつた。それはそうだろう。ホスピスは自己主張をしない。

私は旧知の友、白石マリを見舞いに行つた。彼女は広いひとり部屋のベッドで横になつていたが、思いのほか元気そうだつた。「やあ」と私がいうと、彼女も「やあ」とこたえ、「遠いところ、ご苦労さん」といつた。瘦せたみたいだが、もともと瘦身だったから、それほど目立たない。

お見舞いに持参したチョコレートを、食べるかと尋ねると、うなずいた。彼女は甘党ではなかつたはずだが。一個食べて、もうひとつ頂戴、といった。私はうれしかつた。

「明後日、学校の友達が何人かで来るといつている」と彼女はいつた。「いちおう、誕生日だからね」

それはそれは。

「あんまり弱つてないでしょ」と彼女はいつた。「とくに不満はないのよ。とくに不安もない」

白石マリは同じ学科の一年生上で、一九七〇年には四年生だつた。当時芝居をやつてい

イラストレーション……南伸坊

無邪氣

にずっと映画を観ていた。映画誌を熟読して、名監督や名優や名作の評価を鵜呑みにしていった。

業界に入つて名監督の凡庸さや名優の正体を知つた。名作の裏話も耳にする。タイトルが出てる脚本家が書いたとは限らないと聞いて驚いた。あれもこれもそうだと言う。今でも渋谷の公共放送のドラマのいくつかは、「脚本協力」とタイトルされた人が実質執筆している。名前を出したら自分で書けよ!

映画『ゴッドファーザー』(7)の製作秘話を描く評判のアメリカのテレビドラマ『ジ・オフナー』(全十話) (22)は配信で大評判になり、BSでやつと放送されたので観た。あの時は毎週日曜日夜二話ずつ流されたが、放送が待ち切れなかつた。波乱に満ちた映画製作の舞台裏を飽きさせず見せる。

製作にも加わるプロデューサーのアルバート・S・ラディの記憶から物語化された。ラディと上司ロバート・エヴァンス、秘書ベティ・マッカート(女優がいい!)らがマフィアに、バラマウント上層部に、スタッフやキャスト相手に、次々起きる難題に取り組む。当然ラディの活躍が主だが、俳優出身でカリスマ性のあるエヴァンスと有能なベティのキャラクターが生きている。

マフィアが映画化阻止の横槍を入れて来るが、ラディは脚本を読ませる。原作者マリオ・ブーゲと監督フランシス・フォード・コッポラの脚本は冒頭とラストしか出来ていな

彼女に会いに行つた①

三十一



た私は、彼女が所属していた文学サークルの部室を使わせて欲しいと橋渡しを頼んだ。私は演劇研究会の一員だつたのだが、その「新劇」劇団のコピーのようなやりかたが不満で、それが「分派活動」だと非難されて部室を追い出され、台本を謄写版で印刷する場所も、メンバーがたむろする場所も失つていた。

彼女の紹介で会つた文学サークルの部長「サトケン」は、いいよ、と気軽にいつた。どうせ文学どころではない時世だし、「分派活動」大いに結構。こちらが大家だと認識していてくれさえすれば、自由に使っていいよ。彼女の文芸作品は読んだことがない。一作も書かなかつたのではないかと思う。その彼女は翌年卒業して、外資の会社に勤めたと聞いたときり連絡は途絶えた。若い頃の知り合いとはそんなものだらう。「サトケン」は、後年ラテンアメリカ文学の翻訳家になつた。

それから四半世紀あまり、一九九〇年代の終わり頃、突然彼女から連絡があつた。電話は出版社に聞いたという。まだ個人情報の開示に鷹揚な時代だつた。

彼女はいつた。「とくに用事はないけれど、イヤでなければチョー久しくぶりに会おうじやないの」

私はイヤでなかつた。五十歳になつていた彼女は、夫といつしょにITの会社を経営していた。社業は順調だつたが、問題は別のことにつくつた。まいつたわよ、と彼女は溜息

とともにいつた。夫に女性がいて、子どもまでつくなつていていたのよ。

彼女自身に子どもはいなかつた。できなかつたのかも知れない。夫の身辺は、探偵事務所に依頼した調査でわかつたといふ。そんな込み入つた事情を、まるで利害のからまない遠い昔の知り合いで、エーッ探偵事務所かよ、と驚くばかりの私のようなものに話して気を晴らしたかったのだろう。

しばらくのちの二〇〇一年、私は皮膚がんの手術を受けるために大きな病院に短い入院をした。いちおうがんはがんなんだが、たいしたことのないがんだ、と伝えてあつたのに、彼女はわざわざ見舞つてくれた。

映画ファン垂涎のエピソードもいくつも出てくる。

有名な馬の首のシーンは、美術部が用意した作り物をコップボラは気に入らないで屠場から入手した……へー、そうだつたの?

決まりの「長過ぎるから切れ」と言われるが、シチリアロケに行きたないと粘るコップボラ。ラディは機材屋に次回のオフナーを約束して値切り、ロケ費を捻出した。この手は日本でもよくある。但し約束は大抵守られないが。シチリアを少人数のロケ隊がワンボックスカーで回る。どこかのネット配信大手みたいに、じゃぶじゃぶ金さえ使えばいいわけではないと分かる。

終局上層部押し付けるポスターでもめ、お決まりの「長過ぎるから切れ」と言われるが、アリ・マッグローをステイプ・マックイーとシチリアを少人数のロケ隊がワンボックスカーで回る。どこかのネット配信大手みたいに、じゃぶじゃぶ金さえ使えばいいわけではないと分かる。

エヴァンスは表題の台詞や「観客が見たいものでなく、見るべきものを追求しろ」と名言を吐く。どこかの国のプロデューサーに聞かせたい。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』(双葉社/第7回講談社ノンフィクション賞)『坊っちゃん』の時代。(双葉社/谷口江一と共作・第2回手塚治虫文化賞)。本連載を元にした『昭和的』(春陽堂書店)好評発売中!

N'S
COLUMN

43

西岡琢也

「簡単な仕事なら、誰でもやつてるさ」と口バート・エヴァ、ノスは言った。

一緒に映画を見る。サブスクで、シネコンで、名画座で。シネコンは人が多すぎるし、音もうるさいと文句を言い、下高井戸シネマや早稲田松竹には、ポップコーンが売ってないと言って息子は不満そうだ。

小学2年生が読める漢字は、少ない。だから一緒に吹替版を観る。わたしは、日曜洋画劇場や金曜ロードショーの吹替版の映画を観て、映画を好きになった。いま息子と、日本語をしゃべるイーサン・ハント、日本語をし



やべるインディ・ジョーンズ、日本語をしゃべるピーター・パーカーと一緒に観ている。

今年の夏、息子と一緒に、台詞のない映画をふたつ観た。

一つ目はAmazon Prime Videoで『Flow』。前々回に書いた飼い猫のシローが亡くなる10日ほど前、冷房の効いたリビングで、調子の悪い猫の様子を気にしながら観た。夏休みが始まったばかりの息子が「この黒猫ちゃんの映画、観てみようよ」と言ったのだ。

人間は一人も出てこない。あるのは動物の声、動く水、風と植物の音。

どんな映画か知らずに観たけれど、観終わったあと、しばらく話が止まらなかった。

鯨や鳥の意味はなんだろうか、この映画はどのくらい未来の話だろうか、それとも過去か、人間はどこに行ってしまったのか。もししかしたら動物は、目だけで会話できるんじや

ないかな。あ、そうか、だからこの映画は台詞がないんだね。と息子は言った。

けっこうコワい映画にも感じたので、それを尋ねると「どこがコワかったの？ おもしろい映画だったよ」とあっさりした返事。大人のわたしは、人間の不在が恐ろしかった。

二つ目は『ロボット・ドリームズ』。昨年秋の公開時に見逃し、春頃の下高井戸シネマでの上映を見逃し、夏になってようやく早稲田松竹で観ることができた。

孤独なドッグと、明るいロボット。ひと夏の思い出。台詞がない代わりに、音楽がずっと耳に楽しい。ロボットの胸のラジカセから流れるEarth, Wind & Fireの『September』。

15 映画館の椅子に My Kid's Diary

文と絵 赤波江春奈

踊るドッグとロボット。

粗暴なウサギたちの登場に、息子は憤り、声を出して泣く。ドッグは喪失をうめるため、新しいことに挑む。スキー、凧揚げ、釣り。全然うまくいかない。そんなにすぐに、回復なんかしない。

わたしは死んだ自分の猫を想いながら観ていたのだけど、途中から堪えられなくなってしまった。「お母さん、シローのこと考えて泣いてる？」と耳元で囁く息子。

映画館の椅子に身をまかせてみれば、ほんのちょっと気分がましになることがある。映画を理由にして、泣けばいいのだ。将来、息子が悲しくて苦しくて、どん底の気持ちになった時、そんなことを思い出してくれたらいいのだけれど。

息子が『September』を気に入ったと言うので、映画館を出てすぐにスマホを開き、Apple Musicで聴く。早稲田松竹から高田馬場駅までの道で、帰宅後の風呂の中で、寝る前の布団の上で「バヘドウダ～バヘドウ」と歌って踊った。あつい夏の夜だった。



たんげ・きょうこ 名古屋生まれ。愛知県立芸術大学デザイン科卒業。TIS会員。2012年講談社出版文化さしえ賞。新聞、書籍、雑誌、パッケージ、広告、webなど幅広く活動中。

うおずみ・やすこ 1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通りにUmweltを開く。



直径 6.5cm 高さ 7.5cm

〈後〉 クルミの樹皮などで編まれた籠
デンマーク製 直径 10cm 高さ 15cm

魚の環世界 38 魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク(岡澤慶秀)

ウンベルト Umwelt Textiles & Objects
604-0962 京都市中京区夷川通御幸町
西入達磨町588-1

オリジナリイ
Originally
December
2025

2025年12月15日発行 〈ロゴデザイン〉ヨコカク 〈編集・デザイン〉赤波江春奈+日下潤一 〈印刷・製本〉グラフィック
(発行)ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2025, Printed in Japan 【無断転載禁止】お問い合わせ = akabae@bxg.jp

◆Web = bgraphix.com ◆Twitter & Instagram = @bxg_book_design ◆日下潤一のブログ = www.bgx.jp/blog/
「オリジナリイ」はBGXが毎月発行するフリーペーパー／100部発行

◆ロンドンブックス(京都・嵐山) ウンベルト(京都・夷川) フラヌール書店(東京・不動前)に10部ずつ、
古瀬戸珈琲店(東京・神保町)に5部、置いています

Gunnar Nylund (グナー・ニールンド／スウェーデン／1904-1997)によるストーンウェア(炻器)のうつわ。スウェーデンのRörstrand (ロールストランド) 窯で1950年代に作られました。紫色の釉薬と手のあとが感じられる、線描きのグリッドが印象的です。

ニールンドは、アーティストの両親が学んでいたパリで生まれ、その後コペンハーゲンやヘルシンキに移り住みながら陶芸や建築を学び成長します。彫刻家だった父から手ほどきを受けた動物のオブジェづくりも得意でした。グナー・ニールンドが携わった陶磁器には、デンマーク製 (Bing & Grøndahl, SAXBO, Nymölle) とスウェーデン製 (Rörstrand) のどちらもあるのがユニークなところですが、いずれの窯でも釉薬の研究に心血を注ぎました。この珍しい紫色の釉薬にも彼のこだわりが垣間見えます。

ところで、私は紫という色が幼い頃から苦手でした。その意識を変える出来事があったのはデンマーク留学のこと。あるお店で見つけた手編みの手袋がきっかけです。それは茶色に白の編み込み模様のある毛糸の手袋でした。寒い日だったので買ってそのまま身につけ外に出た途端びっくり、茶色だと思っていた部分が実は鮮やかな紫色だったのです。店内が薄暗かったせいか、いい茶色と気に入ったのが、よりによって苦手な紫。返品しようかと迷いましたが、とにかく寒かったので帰宅し、ためつすがめつするうち「これはこれで悪くないくかも」という気がしてきました。「色が絶えず欺く」と綴ったヨゼフ・アルバースの言葉を思い出しながら。あのときすぐに手袋を返品していたら、このニールンドの炻器を手にすることはきっとなったでしょう。ささやかだけど大切な経験だったと思っています。

今月は国立ハンセン病資料館の展示のデザインに
貢を譲り、私の連載を休むつもりが、伊野さんが
ご多忙で休載。『ウェスカー三部作』の続きを書く。
朝井まかてさんの『実さえ花さえ』の文庫新
装版。ご本人の希望で、酒井抱一、鈴木其一、中
野其明の『四季の花』から絵を使うことができて
嬉しかった。最近読んだ北大路翼の句集『給食の
をばさん』。小学校の給食調理員になった俳人の
日記形式の俳句一年分に給食のメニューとその日
の短いコメントで構成。ニトリルを知る。〈蜘蛛
漬しひトリルをすぐ取り換ふる〉〈驚いて熊も吐
き出す冷たさよ〉(冷凍の鮭)。好きな句も
多いし、句集のスタイルが面白い。(日下)

今月のあとがき



E.Mori